令和3年度　　長野県農業大学校　　評価表

評価　A：目標を上回った　B：ほぼ目標どおりできた　C：目標を下回った

1 学校教育目標

内　　容	R3評価
理論と実技を同時に学ぶ実践型の教育により農業技術の高度化、経営の専門化に対応する知識、技術を習得させるとともに、寮生活や自らテーマを定めて行うプロジェクト学習等により他者との協調、自己の確立等の社会性を涵養し、21世紀の農業・農村を担う優れた人材の養成を目指す。	B

2 重点目標

内　　容	R3評価
学生の学習意欲の向上と授業内容の充実に向けて職員の教育力を向上するとともに、進路決定率100％の成果など本校のPRを積極的に行って出願者の確保に努める。	B

3 当該年度の評価項目等

(1)共通項目（総合農学科、実科・研究科）

対象	評価項目	評価の観点	達成状況 成果（○）と課題（●）	達成状況 改善策（■）	R3評価
学習指導	授業実習内容の充実を図る	**授業改善に向けた取り組み** ○　教授要目に基づいて計画的に授業を実施できたか。 ○　職員の教育力向上のために研修の機会を設けたか。 　県が開催する研修会に参加することができたか。 ○　ねらい、展開、見とどけの観点で授業を行うとともに実物やパワーポイント等を用いたわかりやすい授業を行ったか。 ○　中間テスト等による学生の理解度の把握や学生への授業アンケートの実施と、結果を踏まえた授業の改善ができたか。 ○　学生の授業、進路、寮生活などに関する要望を面談などにより随時把握し、学習内容や進路指導の参考としたか。	○教授要目を確認し計画的に授業を実施した。 ○新型コロナウイルス対策のためオンラインによる授業を実施した。 ○職員研修を10月から4回開催した。 ○1月に開催される県主催の作物別研修に参加した。 ○各科目ごとに3つの観点で授業を行い、各作目の実物やパワポによるわかりやすい授業に努めた。 ○授業アンケートを10月及び2月に実施し、回答を職員会議で共有した。 ○中間テストや確認テストを実施し理解度を把握して授業の改善につなげた。 ○個人面談を2年生は4月、1年生は11月に実施し、進路・課題を把握した。 項目 / 充足率（%） R3 / R2 3観点による授業 100 / 100 実物を用いた授業 87 / 88 ﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄを用いた授業 60 / 63 中間ﾃｽﾄを用いた授業 34 / 33 その他の取組 83 / 67	■学生アンケート結果等に基づいた教授要目の見直しを検討する。 ■年度当初からの計画的な研修会を行う。	B
		新しい知識・技術への対応 ○　スマート農業に関する講義の充実と関連企業との連携強化ができたか。 ○　青年農業者、先進的農業経営体への視察研修や講義を行ったか。 ○　GAPや農場HACCPなど新しい国際規格の知識習得や、SDGsやエコマネジメントなどの農場経営における実践について講義、演習を実施したか。 ○　「長野県農業を担う人材の教育支援協定」を活用した講義を行うとともに、県内農機メーカーとの連携を検討できたか。 ○　関係試験場の開発した新技術や新品種について、現物を踏まえた適期での講義・実習が実施できたか。	○実践経営者コース2年生2名は、野菜の模擬経営を行うビニールハウスへ「みどりクラウドシステム」を設置し、携帯端末からハウス内の温度管理等を確認するなどの取り組みを行った。 ○実践経営者コース2年生1名は、ドローンの操作教習を行う企業と連携し、水稲の模擬経営において除草、いもち病防除の計3回を行った。 ○スマート農業について講義の充実のため、関連企業の協力を得て、現地での講義を開催した。 ○就農準備演習やゼミナール講義で視察研修や講義を実施した。 ○GAPについては、1学年を対象にGGAPの知識を習得するための講義を実施し、2学年を対象に当校農場を対象にリスク評価など実践的な演習を行った。 ●自然災害によりぶどうのGGAP認証取得を延期した。 ○特別講義で、SDGsやエコマネジメントなどの農場経営における実践について学ぶことができた。 ○「長野県農業を担う人材の教育支援協定」を活用した講義を、プロジェクトと関係付け実施した。 ○担当研究員による新技術や新品種に関する情報、品種や病害虫等の現物を用いた授業の実施に努めた。	■民間企業と連携し、スマート農業を通年で実践する機会づくりを進める。 ■幅広い専攻でスマート農業技術をプロジェクト研究に生かす手法を検討する。 ■GGAPへの理解を深め、学生も参加した認証取得を目指して準備を進める。	B
		資格試験の受験者数と合格率の向上に向けた取り組み ○　資格・検定試験の必要性を理解させて受験者数のアップを図るとともに、合格率目標を定め、学生の学習意欲を高められたか。 ○　合格率向上に向け、受験にあたり繰り返しの事前学習や小テストを実施したか。 ○　指導者のスキルアップに取り組めたか。	○農業簿記検定は7月及び11月に延べ61名受験し2級1名、3級22名合格した。合格率は37％で前年の52％を下回ったが、合格者数は前年と同数となった。 ○農業技術検定は7月及び12月延べ61名受験し2級11名、3級21名合格した。合格率は52％で前年の45％を上回った。合格者数は試験が2回あったこともあり＋23名となった。 ○毒物劇物取扱者試験について、演習の講師を一部変更した。44名受験し、16名合格した。合格率36％で前年22％を上回り、合格者数は前年比＋5となった。 ○家畜人工授精師や大特・けん引、車両系建設機械等の資格試験は受験者全員が合格することができた。 ●テキストや過去問を提供し事前学習を指導したが、小テストは実施できなかった。 ○学生の指導は一部を外部講師に頼ったが、職員による事前練習や学習指導に取り組むことができた。	■農業簿記検定・農業技術検定については、1年生で当日受験しなかった者が多数いたことから、受験に当たっての意識や準備について、申込時に徹底する。 ■過去問や小テストを使った指導体制を組めるよう検討する。	B
	効率的・計画的な農場利用で学習効果を高める	○　実践経営者コース2年生の模擬経営実施のための農場や施設等の確保・調整ができたか。 ○　計画的な作付により、年間通したほ場の有効活用が図られたか。 ○　1年生は、必要な実習ができたか。また、現地体験実習に、必要な基礎的知識、技術を習得させたか。 ○　圃場管理運営の打ち合わせに基づいて各専攻とも適期にほ場管理ができたか。	○旧年度中に作付計画を作成し、模擬経営のためのほ場・施設等を確保するとともにほ場の有効活用を図った。 ○1年生実習用のほ場を確保し、基礎的な栽培管理の実習を行うことができた。また、現地体験実習前に専攻ごとに時期の作業を行い、基礎的な知識、技術を学んだうえで現地体験実習に行くことができた。 ○ほ場管理打合せを適宜行い、摘果作業や盆花の出荷調製などを共同で行い、適期にほ場管理を行った。		B

対象	評価項目	評価の観点	達成状況 成果（○）と課題（●）	改善策（■）	R3評価
進路指導	個々に適した進路選択、決定、実現を図るとともに、円滑な就農を推進する	○　学生の進路の意向を聞き取り、その情報を職員間で共有できたか。 ○　1年生は11月末を目途に将来の進路を決定するよう指導できたか。 ○　2年生は12月末を目途に全員の就農及び就職先等決定するよう指導できたか。 ○　雇用就農に向け法人説明会への参加を促すなど法人との接点を多くし理解を深める指導ができたか。 ○　進路・就農指導等に関し、関係機関とも連携して対応できたか。 ○　関係機関と連携し、学生の円滑な就農支援や卒業後のフォローアップに取り組めたか。	○農経2年生の就活状況を職員で共有し、積極的な就活を促した。 ○個別面談の実施により、学生の希望を把握するとともに、農業経営演習Ⅰ・Ⅱを通じ先輩農業者や卒業後就農した者の講義により、就農への意識付けを行った。 ○1年生は、入学直後の個人面談、10月の就農面談、11月の三者面談、必要に応じて保護者面談等を行い、進路指導を行った。また、その情報を職員会議、学年会議等で共有し、的確な指導につなげた。 ○農経2年生の就活・就農（・進学）の12月末現在の就職決定率は100％となった。 ○2学年の学生との個人面談を行い、自家就農希望者は12月の冬休み中に関係機関との打ち合わせ会を実施し、スムースな就農ができるようサポートした。 ○6月14日（月）に農業法人等合同説明会を開催し、昨年より3法人多い参加があった。また、説明会参加の法人等への就職決定は、10名（15名中）となったほか、会社訪問にもつながった。 ●学生や卒業生への支援に関しては個別に対応しているが、県関係機関が開催するイベントなどとは効果的な連携は十分ではなかった。	■引き続き進路相手先の訪問等の活動を早期に始めるよう、個別に働き掛ける。 ■農学部全体として、就農希望者と現地機関、関係機関との面談等を実施し、就学中からの情報共有に努める。	A
生活指導	社会的規範意識を高め、基本的生活習慣の育成に努める	○　学年担当者会議を定期的に行って教授間の情報共有を行い、全員で指導する体制ができたか。 ○　ホームルーム、交通安全・防犯・健康講座などを通じて、生命尊重や社会的ルールを守る意識を高めることができたか。 ○　寮生活や自治会活動を通じて社会人としての意識を醸成する指導ができたか。	○今年度はメンタル面で課題を抱える学生が複数名いたので、学年担当者会議等を随時行い、校長、副校長、学年主任、教授間で情報を共有しチームとして対応した。 ○課題等の発生に応じ学年担当者会議に合わせ月1回の教務会議、自治会役員会等で事前に打ち合わせを行い情報共有を行った。 ●課題を抱える学生への対応には職員の更なるスキルアップが必要だった。 ○ホームルームを計画に沿って開催し、必要な事項の伝達を行った。 ○交通安全・防犯研修、AED研修、健康講座を開催した。 ○ホームルーム、休暇前後に開催される全体集会で交通安全・防犯についての意識向上を行った。学生による重大事故等の発生はない。 ○寮生活における生活指導、自治会活動における社会組織活動に必要な事項の指導、現地体験実習前の社会常識の指導等を行い、社会人として通用するよう指導を行ってきた。 ●寮生活では寮内での生活ルールや共有スペースの整理や清掃について自治会や専門部を通じ行うように促しているが、一部で整頓や夜間の騒音など徹底されない面がある。	■今後もメンタル面で不安を抱える学生が増えてくることが予想されるので、職員のスキルアップや関係機関との連携を図るなどの対応を行っていく。 ■社会的規範を考える自治会活動、特別授業、学生自ら考えるための場の提供をとおして意識の向上を図る。	B
	自他の生命・人権を尊重する精神を養い、男女が共に支えあう豊かな心を育成する	○　寮生活を通じ、先輩と後輩の関係を学び、他人を尊敬し思いやる心を育てることができたか。 ○　各コース間および学年間の交流が図られたか。 ○　各学科ごとの環境に対応した指導ができたか。	○コロナ禍で学校行事が制約を受けるなどの事情があったが、学生部職員（教授）が学生自治会活動への指導等を中心に、社会生活に必要な人間関係や人間尊重等について指導した。 ○自治会役員会や全員参加の専門部会活動で1年生、2年生で協力するように組み合わせ、協力するように進めている。 ○専攻実習等「のうだい屋」「農大祭・収穫祭」販売準備等　1・2年生で合わせて行うように配慮している。クラブ活動等は積極的に行っている。また延期されていた歓迎会は状況を見ながら12月上旬に実施した。 ○実科・研究科合同の保健体育や視察研修などを通じ十分な交流が図られた。また、畜産実科、南信実科と体育の合同授業を実施しまた、南信実科とは合同チームで体育大会に参加し、交流できた。 ●自治会活動での1・2年間での交流行事等の開催が中止や延期され年度当初からの交流が難しくなった。	■自治会活動での1年・2年生間の交流事業、1・2年生共通の実習を年度当初から組み交流を図る。	B
学校運営	農業機械や施設機器の充実と適正な管理	農業機械の充実 ○　農場実習等の農作業に必要な機械と設備の修繕や更新は計画的に行っているか。 ○　圃場管理に支障が出ないよう、十分な準備と技能の伝承を進められたか。 ○　導入したスマート農業機器と設備の効率的利用ができたか。	○使用年数が経過している施設、農業機械が多いが、予算の制約もあるため、優先順位を付けて修繕更新を行っている。 ●修繕等により作業機が使用できない時期があり適期作業に支障が出てしまった。 ●みどりクラウド、電動剪定ばさみを模擬経営や専攻実習で活用できたが、タブレット端末の効果的活用ができなかった。	■予算の効率的な運用や早期のメンテナンスによりトラブルを最小限にするよう心掛ける。 ■マニュアルや画像による技術の伝承を検討する。 ■KSASなどのシステムを活用しクラウド上でデータ管理する手法を検討する。	B
		機械の適正な管理 ○　農業機械、施設及び機器の故障や修理情報が職員間で共有されるとともに、使用後の保守点検のルール化や使用簿への記入などにより、適切な管理運営が行われているか。 ○　適切な操作方法を習得させたうえで学生に機械利用させたか。 ○　修繕可能の機械類を見極め備品の有効活用がされたか。 ○　使用できない機械の廃棄が行われたか。	○使用年数が経過している施設、農業機械が多く、故障等のトラブルの発生が多くなっており、故障・修理情報については職員間で情報共有して対応した。使用後の保守点検、使用簿の記入等は実施しており、適切に管理している。 ○学生の農業用機械使用にあたっては、点検・整備・安全操作など必要な講習等を受講したうえで、専攻教授の指導の下使用させている。 ○予算の制約がある中で、対応可能な修繕やメンテナンスについては学内での対応を行っている。 ●修繕か廃棄かの見極めが難しい。	■使用簿の記入を徹底するとともに、故障・原因・修理情報の共有を図る。 ■学生数の多い専攻では指導職員の複数支援ができる体制を考える。 ■予算の効率的な運用や早期のメンテナンスによりトラブルを最小限にするよう心掛ける。 ■使用できない農機具の廃棄は年度末に検討予定。	B
	学校用地や施設の適切な維持管理	○　GGAP認証取得団体にふさわしい整理整頓がなされているか。 ○　実習棟、機械庫等は、定期整頓日の設定などにより整理整頓がなされているか。 ○　定期清掃日の設定などにより、農場以外の学校用地や校舎等施設の維持管理が適切に行われたか。	○本年度は災害によりGGAP認証取得への取組を中止したが、農場内の整理整頓については、随時行うことができた。 ●定期整頓日は設定できなかったが、実習等に合わせて整理整頓に努めた。 ○定期的に草刈りや清掃、施設等の自主点検を行い、維持管理を適切に行うことができた。 ○定期清掃を実施し、校舎の美化に努めた。	■定期整頓日を設定し整理整頓に努める。	B
	学生募集のPRを更に充実する	○　学校案内、募集チラシを作成して配布し、農業大学校への関心を高めることができたか。 ○　サンデー見学会、オープンキャンパスおよび体験学習等を充実し、農業大学校への関心を高めることができたか。 ○　高校訪問や進路指導担当教諭会議等を通じて農大のPRや情報収集ができたか。また農業高校以外の進路担当教諭にも十分周知できたか。 ○　農業高校との一層の連携を推進するために、「農大・農高の連携会議」を開催し、農高生の体験入学等を実施できたか。	○学校案内パンフは、4ページ増やし内容を充実させ、2,500部作成し、募集チラシとともに県内全高校や希望者に配布した。 ○広く周知してもらうため、ポスター（B3版）300部作成し、県内全高校、道の駅、イオン、コンビニ等に掲示依頼した。 ○実科・研究科独自の学校説明資料や案内チラシ、共通のパンフレットを作成し、高校訪問時や個別の学校訪問者へ配布した。 ○ｵｰﾌﾟﾝｷｬﾝﾊﾟｽは、新型コロナウイルス感染対策として、人数制限（各日定員50名）を設け、2日間開催し、生徒51名・保護者43名が参加した。（参加生徒のうち24名が入学試験を受験）参加者からのアンケート結果では、「よく理解できた」、「進路決定の参考になった」等の回答が多かった。 ○昨年開催できなかった農業高校進路担当教諭会議は、5月に開催し、農大のPRや学生募集を周知した。 ○今年度の高校訪問は、「原則、過去5年間で農業経営コースに入学実績がある高校」にターゲットを絞るとともに、新たに県内商業高校（5校）を追加して募集活動を行い（49校）、後日フォローアップを実施し志願者の動向の把握に努めた。 ○連携会議を3回開催し農業高校との連携を推進した。体験入学は新型コロナ対策のため日帰りのスケジュールとした。	■引き続き在学生を活用したパンフ作成を進める。 ■進路担当者会議の開催時期、対象学年を農業高校と調整する。	A

対象	評価項目	評価の観点	達成状況		R3評価
			成果（○）と課題（●）	改善策（■）	
	ホームページの充実を図る	○　改革を進めている農大の教育内容や就農支援の様子を各専攻のブログ等で頻繁に発信できたか。 ○　入試案内、行事等を計画的に紹介するなど、積極的に大学校のPRを行うことができたか。 ○　広報委員会を定期的に開催するとともに、HPのあり方が検討されたか。	○農大専用ホームページのブログの掲載回数を増やし、農大の情報発信に努めた。このなかで、授業の様子や行事等の紹介を充実させ、農大をPRすることができた。 ○農大ホームページにおいて、学校評価の公表、学習内容・進路、授業料等減免に係る確認申請書や授業料等の紹介、入試案内、オープンキャンパスや学校見学会などの行事の紹介を行い、積極的にPRした。 ○コロナ禍で寮内を見学することが出来ないこともあり、動画やYou Tube等による学校の様子をHPに掲載した。 ○広報委員会を2回開催し、スマホ対応の検討や動画掲載等を協議した。 ●広報委員会を定期的に開催することがなかった。	■学生も含めたブログの情報発信の拡大を進める。 ■HP等での情報発信に必要な素材確保に努める。 ■予算の制約によりスマホ対応ができなかったが、次年度以降検討する。 ■新たな広報手段等を検討するために、定期的に広報委員会を開催する。	A
	予算執行の適正化を図る	○　計画的な予算執行と無駄を無くすため、農場は専攻別に、管理運営は費目別に執行状況を管理し調整できたか。	●施設の故障や農業用機械の故障により予算がひっ迫し、計画的な予算執行ができなかった。また、農場の予算執行が一部計画的にいかなかった。 ○農場は専攻別に、管理運営費は費目別に予算執行状況を把握し、職員への情報提供及び執行時期等の調整を行い、計画的な予算執行することができた。	■予算の計画的な執行になるよう心掛ける。	B

（2）実践経営者コース

対象	評価項目	評価の観点	達成状況		R3評価
			成果（○）と課題（●）	改善策（■）	
学習指導	授業実習内容の充実を図る	○　1年生における各論実習の充実と目的意識を持った農業経営体験実習ができたか。 ○　希望する就農形態に合わせて模擬経営と長期農業経営体実習を適正に選択するとともに、就農後予想される課題の把握と対応策が検討できたか。	○農業経営体験実習は、時期ごとの作業が経験できる配置とし、次年度模擬経営を実施するための技術習得ができている。次年度は、校内で2名が模擬研修を実施する予定となっている。 ○模擬経営については4名が実施し、4名とも目標の売上を達成した。また、就農に向けた課題も明確となっており、就農準備が着実に進んでいる。 ○長期農業経営体実習は、2名ともスムーズな就農に向け重要となる研修テーマを掲げて実習を行った。 ○就農後に予想される課題の把握については、6月に学生の就農地を所管する県支援センター及び市町村、JA等の関係期間と連携会議を開催し、情報の共有と今後の対応について検討を行い円滑な就農に向けた体制づくりを進めている。また、就農計画を作成し2月に提出を予定している。	■長期農業経営体実習の実習先農家については様々な機関と情報を共有したうえで実習先を決定する。 ■模擬経営についてはスムーズな就農に欠かせないことから、実施場所の選定にあたっては農学部、研修部の機能を最大限活かすとともに、両部を超えた農大として所管する組織の機能をフル活用し、実施場所を決定する。 ■長期研修については、研修先のマッチングを丁寧に行うとともに、研修先への長期研修の目的等をしっかり説明を行う。	B
進路指導	個々に適した進路選択、決定、実現を図るとともに、円滑な就農を推進する	○　就農支援プログラムに基づき、早めに関係機関や研修先農家と連絡を取りあい就農形態に応じたきめ細かな個別就農支援ができたか。 ○　職員間の連携により、授業計画、授業管理などのコース運営と就農支援が一体的に実施できたか。 ○　現役農業経営者にアフターフォローを依頼する等、卒業生のフォローアップが充実できたか。	○就農支援プログラムに基づき、学生の情報を関係機関に提供した。また、1年生3名、2年生5名に対しては就農先の支援センター、市、JAと連携し、就農に向けた情報交換を行った。研修先農家と連絡を取り合い、個別ケースごとに就農に向けた準備を支援を行った。 　また、就農計画作成支援を行い、2年生については認定新規就農者の認定につなげるため、2月に提出を予定している。 ○2年生は就農地の市町村に就農計画様式、認定会議の開催時期の把握を自ら行うなど就農に向け自覚と責任をもった行動を行った。 ○模擬経営を行っている2年生3名は、1年時にお世話になった農業経営体験実習先農家へ生育状況や初出荷、出荷物の状況等をメール等で連絡してご指導いただくなど、現役農業経営者からのフォローアップをいただいた。 ○職員間の連携により授業計画に基づきコースの管理運営を実施した。農業経営に関する各論の講義と農業経営者の講義や現地訪問による意見交換会を実施し、学生が具体的な就農後の方向性を見出だす為の運営となった。 ○経営が安定していない卒業生に対し、農業農村支援センター、先輩農業者等によるフォローアップを行った。	■個々の就農について担当教授によるきめ細かな対応に加え、行政、JA等の関係機関による定期的な情報共有機会を設けるなど組織的な対応を行う。	A
学校運営	学生募集のPRを更に充実する	○　就農に向けた相談会、コース説明会等の通年実施や農業高校への働きかけ等によりコースの内容等をアピールし、効果的な募集活動ができたか。 ○　独自の募集チラシを作成して関係機関や団体に配布し、募集の周知ができたか。 ○　市町村やJA等の関係機関、団体と連携を密にし、人材の掘り起こしができたか。 ○　専用ブログやメディア等様々なPR媒体の活用等により、授業内容や卒業生の営農状況を紹介するなど、効果的なPRができたか。 ○　3回の入試を行い、令和4年度出願者の確保に努めたか。	○農業高校でのｶﾞｲﾀﾞﾝｽや就農に向けた相談会、コース説明会で受験希望者に向け必要な事項、実践経営者コースの支援内容についてアピールできた。 ●社会人経験者等へのアプローチが不十分だった。 ○独自の募集チラシを作成し、関係機関との会議や各支援センターでの就農促進会議等で配布した。 ○オープンキャンバス等で、卒業生の動画を配信するなど新たなPRを行った。 ○例年の信毎のほかに新たに3社が掲載した。また、ネットでの募集掲載については、掲載時期、掲載範囲等の見直しをし、実施した。 ○専用ブログへ学生の栽培状況を情報発信し、コースのPRに努めた。	■高校生のほか社会人経験者等への実戦経営者コースのPRを丁寧に行っていく。	B

（3）農業経営コース

対象	評価項目	評価の観点	達成状況		R3評価
			成果（○）と課題（●）	改善策（■）	
学習指導	授業実習内容の充実を図る	○　プロジェクトは、学生の能力に応じて経営管理力を習得させるよう、全学生が経済性の検討を充実するとともに、労働時間の考察が取り入れられたか。 ○　1年生によるプロジェクト巡回は、事前指導により質疑応答など活発に実施できたか。 ○　1年生は全ての専攻でﾐﾆﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄが実施されたか。 ○　マーケティング手法の習得を目的として、のうだい屋と農大祭が実施できたか。また、農大祭開催時に、1、2年生間で協力できたか。	○2年生のプロジェクト研究では39名中32名が経済性を検討し、21名が労働時間の考察を行った。 ○プロジェクト巡回は、1人1つ以上の質問をするように指導し、2年生の研究内容について理解を深めた。 ○2年生のプロジェクト研究を参考にし、来年度に向けたプロジェクトの事前準備を行うことができた。 ○各専攻でミニプロジェクトが取り組まれた。 ○のうだい屋は6回計画したが、新型コロナ対策で2回は中止となった。また、2年ぶりに農大祭を開催し1，2年生が協力して運営することができたが、生産物が不足する場面も見られた。	■体験実習の農家や地域が抱える課題からプロジェクトが計画されていくよう指導を進める。 ■のうだい屋、農大祭に向けて販売・運営手法の伝承や生産計画に基づく販売物の確保に努める。	B
進路指導	個々に適した進路選択、決定、実現を図るとともに、円滑な就農を推進する	○　就農への意識づけに向け、農業経営演習を充実できたか。 ○　就農支援プログラム等に基づく様々な就農形態に応じた個別、計画的支援ができたか。 ○　卒業生を就農地の現地機関に確実につなげることができたか。	○法人就農者からの野菜栽培品目の技術力向上の自主的要望等に対応を行った。 ○1年生については、農業経営演習において就農等進路決定のための外部講師や卒業生などの講義により、情報提供を行うなど充実できた。 ○農業法人就農希望者には、連絡先の提供や現地への訪問等を通じ就農までをフォローした結果、 14名が内定を得た。 ○2学年の就農希望者3名については、就農後の目標等作成支援を行い、12月の冬休み中に、関係機関との打ち合わせ会を実施し、就農地の現地機関へ情報提供を行った。	■JAや県職等公務員の希望者について、農業経営演習の中での情報提供を行う。	A
学校運営	学生募集のPRを更に充実する	○　3回の入試を行い令和4年度出願者の確保ができたか。	●推薦・前期・後期の3回の入試で令和4年度の出願者を確保したが、出願者数は前年度を下回った。	■農業高校との連携をはじめ、募集のためのPRをより強化していく。	B